

日本の街・世界の地域

シカゴ(Chicago) イリノイ州 人口 270 万人



市南部のソルジャーズ・フィールドから都心を望む

1981年の夏、初めてアメリカへ出かけた。サンフランシスコを経由して、翌日の夜行便で東部の玄関口シカゴに入った。8月初めの日曜朝だった。オヘア(O'Hare)空港からバスで都心に入る。摩天楼がそびえるループ(The Loop)と呼ばれる都心は、日曜日のせいか、静かな朝を迎えていた。林立する超高層ビルの足下に設けられた公共空間には、ピカソやミロなどの美術家が腕を振った野外彫刻が置かれ、その無機質な空間に潤いを与えていた。しばらくその地区を散策し向かったのは、ループの東、ミシガン湖側のシカゴ美術館(The Art Institute of Chicago)だった。その隣に郊外に向かう私鉄のターミナルがあり、その電車に乗るためだった。ここで失敗をした。駅のトイレに、何と財布を置き忘れた。乗車する前に気づき戻ってみると、ボックスから出て来た人がにやっと笑っている。中を見ると財布は無傷で残っていた。アメリカの大都会は危ないと言われていたが、それは一概にいえないのではと思った。

シカゴ大学のキャンパスにて

ディーゼル車がけん引する2階建ての列車で向かったのは、この街の南部、ハイパークと呼ばれる所。ここはシカゴ大学(University of Chicago)のキャンパスが広がっていた。駅から歩いてすぐの国際学生寮に入り二泊の手続きを

する。1ドル240円時代で、アメリカでの宿泊は決して安くはなかった。出国前、銀座の洋書店「イエナ」で買った『Where to stay US』というガイドでこの安宿を見つけていた。閑散とした夏休みの寮には、日本からの留学生が多く残っていた。中庭に面するテラスで、テニス帰りの彼らに交じり談話した。主に通産(現経済産業)省やその他省庁からの派遣者だった。当時、日米間には「貿易摩擦問題」が横たわり、日本が動かなければならぬ状況となっていた。そうしたことも話題となった。日本の政策形成は、こうしたアメリカ留学組の経験と交流を土台にしているのではと思うと、対米依存が続く日本のあり方に何か重いものを感じた。

昼食後、隣接する大学キャンパスに足を踏み入れた。その一角にある体育館に入ると、なぜかラウンジらしき場所があり、時代がかった白黒テレビが映っていた。流れていたのは、アメリカ人が「ソープオペラ」と呼ぶ主婦層をねらった昼帯のドラマだった。スポンサーが石鹸・洗剤メーカーが多いのでこの名がついたそうだが、私には延々と繰り返されるCMが長いのが気になった。そばで黒人の少女がバスケットボールを持ち、一人ドリブルとシュートに興じていた。近所に住む住民が勝手にやって来て休みで学生のいないこの施設を独り占めしているようだった。ノーベル賞を輩出するこの大学のキャンパスは、ハイ・ソサエティーと言った印象を受けるが、皮肉なことに周辺は都市の発展と変化の中で取り残され、いつの間にか低所得の黒人街へと変貌していた。「シカゴ・サウス」と呼ばれている。この数年後、東部の大学を出た政治志向の青年が地区のオーガナイザーとして来ることになった。それが、後のバラク＝オバマ大統領である。

大財閥ロックフェラーの寄付金でできたというこの大学には、その名を冠する記念チャペルがある。好みのゴシックの会堂なので、しばし内部を見学した後、クアドラングルと呼ばれる大学の中心、校舎に囲まれた緑濃い四角な中庭

を歩いた。この時は、キャンパスの北側にある野外彫刻、ヘンリー＝ムーア作の『アトミック・エナジー』を見ることはなかった。大戦中、この地に人類初の原子炉ができ、そこで生成されたプルトニウムが長崎の原爆に使われた。そのことを記念する彫刻だった。

ダウン・タウンにて

午後は、昨日来た電車でダウン・タウンへと戻る。ループの北側には、華やかに「マグニフィセント・マイル」と呼ばれるミシガン通りが北へ伸びていた。その途中右手に、超高層のジョン＝ハンコックタワーがそびえていた。早速、最上階へと上がってみる。スカイウォークと呼ばれる展望階からは、シカゴの街とその東に広がる青く美しいミシガン湖が見下ろせた。ビルの谷間だが人口の運河であるシカゴ川も垣間見えた。五大湖の一角であるミシガン湖から、長大なミシシッピー(Mississippi)川へとつなぐこの運河のおかげで、シカゴは交通の要衝となった。大草原をその後背地にもつこの街の重要性は、眼前の景色からも理解できた。

ミシガン通りには給水塔(water tower)という壁に彫刻が施された古風な建物があり、中には市水道局の沿革が展示してあった。19世紀にミシガン湖沖の水をそのまま利用していたため赤痢が広がり、浄水設備の必要が生まれたこと。1871年の大火ではかろうじて焼け残り、以来この通りのランドマークになったこと、などが解説されていた。ちなみに、シカゴの水は旨い！



緑色のシカゴ河 奥の塔はチューインガムのリグレイ・ビル

まるでバスクリンの緑色かと思わせる化学物質を溶かしたシカゴ河を渡り、再びループ地区に戻って来た。相変わらず頭上に行くその名もループと呼ばれる鉄道が、レールをきしませ走って行く。キーンとうるさい。その西側に、ユニオン駅の豪壮な駅舎があった。20世紀初めに流行したボザール様式の、神殿のような建物だ。中に入ると、これまた豪華なその名もグレートホールと呼ばれる大理石の広間があった。20世紀後半、アメリカの旅客鉄道はその重要性を失い、遠距離客は空路に流れた。この駅舎が出来た頃の賑わいはとうに失われ、今この空間にはゆったりとした時間が流れていた。この駅舎の階段で、映画『アンタッチャブル』の一シーンが撮られるようになるとは思ってなかった。

翌朝、グレイハウンド・バスで街を出、湖の南岸を東へ回りながら、ミシガン州をめざした。

10月末のシカゴへ

この街を再訪したのは93年の10月末、新婚旅行の際だった。新妻との旅は、シカゴ経由で始めボストンに行き、そこから車を借りてニュー・イングランドの紅葉をめぐり再びボストンから空路シカゴに戻る道をたどった。

オヘア空港に私たちを迎えたのは、妻の日本人の友N夫人とその長男親子で、車で北郊のエヴァンストン(Evanston)にある自宅へ案内してくれた。途中、10月末の黄葉の中に雪が降るのを見た。後から、この地が亜寒帯であることを知った。一面に落ち葉が散り敷くN氏宅は、典型的な中流家庭の一戸建てで、地下室付きの2階屋だった。地下室のボイラーの温風が、各部屋のダクトから出るセントラル・ヒーティングで、室内は快適だった。その晩はN氏が歓待してくれ、皆で都心南側にあるチャイナタウンに出かけた。円卓を囲んだ中華は美味だったが、ここでも通り一つ南だと治安が悪いと言われた。声楽家のN氏は、日本での職がなかなか見つからず、シカゴの日本人学校での音楽教師の話にのりこの地に来た。その後、長女がこの地の高

校に留学。さらに長男も音楽修行で来て、最後にピアノ教授の口を捨てて N 氏夫人が渡米したという。音楽一家だった。

翌 31 日の日曜日、N 夫人が通う法人向けのキリスト教会へと出かけた。教会は異国の地で何かと心細い思いもする同胞にとって、大事なコミュニティーになっていた。礼拝が終わり午後のお茶の会に呼ばれた時、私たち同様遠方から来たゲストの中に黒い肌のアフリカ系の青年がいた。その母は日本人だという。こうした人々がいることで、教会が開かれた場所であることを理解できた。

ハロウィンの日に



シカゴ美術館(二頭の獅子は、この街のシンボル)

この日、ドイツのライプツィヒから指揮者のクルト＝マズア率いるゲヴァント・ハウス管弦楽団が来て、演奏すると聞いていた。前年、ライプツィヒに行った際それを逃していた私は、ぜひ聞いてみたいと思っていた。しかしチケットは電話予約だという。この予約を N 氏の長男にお願いして、何とか入手することができた。電話でクレジット・カードの番号を告げるやり方は、いかにもアメリカ的だが、今から思えば大変危険な手法だった。演奏会場はシカゴ美術館に近いシカゴ・シンフォニーの拠点、『オーケストラ・ホール』だった。そこで美術館を訪ねてから、行くことにした。

あいにく氷雨(ひさめ)だったが、館内は暖かく快適だった。印象に残ったのは、日本の三菱

(現三菱東京UFJ)銀行が後援していた浮世絵のコレクションと、精巧に作られ芸術の域に達したミニチュア・ハウスのコレクションだった。順路の途中で別館へと渡るガラスに覆われたブリッジがあり、外にあの私鉄ターミナルのレールを見下ろすことができた。

さて夕刻、来場者で賑わう『オーケストラ・ホール』の入口で、ドアを押し開け中へ入ろうとすると、後から次々と客が来て、その手を離せなくなった。列が途絶えた時思わず「私はドアボーイか」と嘆くと、妻だけでなく"door boy"だけ聞こえたのか、通り過ぎた老夫妻までが振り返って笑ったのにはこちらも苦笑するしかなかった……。コンサートでは 3 階席から見下ろすようにして、メンデルスゾーンの交響曲 4 番『イタリア』に聴き入った。ドイツで聴けなかった演奏を、このドイツ系が多いアメリカの都会で聴くという奇遇で貴重な経験だった。帰宅したその晩はハロウィーンで、キャンディーを用意していた N 夫人から「今晚は近所の子どもがたくさん来て、”Trick or treat?” と挨拶されたわ」と楽しそうに話すのを聞いた。

旅の最後の日、再びオヘア空港に車で送ってもらい、いざ搭乗というところで何と私の名を連呼するノースウエスト航空(現在はデルタ航空に合併)のアナウンスが流れた。出発時間を確認せず、ぎりぎりに到着したのに気づかなかったのだ。お礼を言うのもそこそこに、慌てて搭乗口に駆け込むはめになった。N 氏一家には、大変お世話になった。

それから時が流れた。N 氏一家は、無保険に近い医療制度(一回の手術で何と百万円!)に悲鳴を上げながら、今もシカゴで暮らしている。

了
追補 そのシカゴにこの春(2017 年)行くことになった。シカゴから一日がかりで、ミズーリ州で留学生活を送る長男に会いに行くためだ。シカゴでは、再び二十年ぶりに N 氏一家に再開することになる……。